

2 文章のいろいろ

これから、いろいろな文章の例を挙げます。緑か青に色分けがしてあるのですが、それぞれどのような特徴があるでしょうか。考えてみてください。

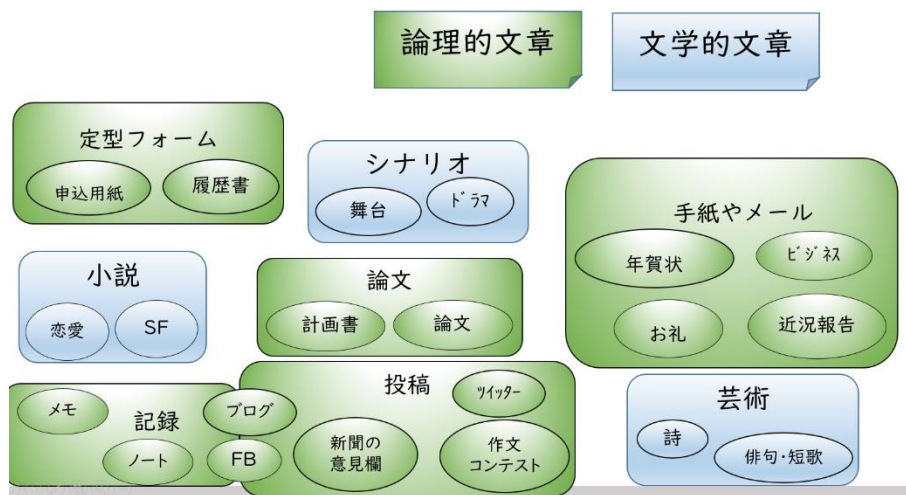


図1 文章のいろいろ

定型フォーム。申込用紙や履歴書などがここに含まれます。みなさんは日本語で書いたことがありますか。シナリオ。舞台やドラマには、シナリオがあります。俳優たちは、劇作家が書いたシナリオを覚えて、音声で再現しています。手紙やメール。手紙やメールには、個人で送るものと、ビジネス上の関係で送るものがありますね。個人で送るものには、年賀状、お礼の手紙、近況報告の手紙などがあります。ビジネスには、ものの売り買いをしたり、新しい商品の案内をしたり、交渉をしたりするメールなどがあるでしょう。小説。恋愛小説に涙したり、SF小説を読んでワクワクしたりしますね。論文。大学を卒業するとき卒業論文を書かせることが多いと思います。論文を書くにあたって、まず計画書を書いて先生のチェックを受け、それから半年や一年をかけて論文を完成させますね。芸術。詩や俳句、短歌などがここに含まれます。俳句

や短歌は、感じたこと、目に映った風景などをいかに短い文章の中で美しく表現するか、書き手は工夫します。記録や投稿。記録は自分のために残す文章、投稿は特定の情報、自分の意見や経験を他の人に広く伝えるために送る文章のことです。最近はたくさんの SNS がありますが、ツイッターは広く知らせたい内容が多いので投稿、ブログやフェイスブックは個人の記録と広く伝える投稿の中間あたりかなと思いますが、どうでしょうか。文章の種類にはこのようにいろいろありますが、緑のグループ、青のグループをまとめて、どのような共通点が浮かびますか。

緑のグループは、「論理的文章」と言います。論理的文章の特徴は、情報を正確に伝えたり説明したりして、読み手を納得させ、これからの行動に影響を与えるところに特徴があります。ある程度決まったルールがあるため、トレーニングを積み重ねれば、ある程度書けるようになります。

もう一方の青のグループは、「文学的文章」と言います。文学的文章は、読者を感動させること、楽しませること、書き手が表したい世界を自由に表現することが目的です。文学的文章は芸術として優れていること、オリジナリティがあることが大切です。そのため、トレーニングしても身につかない要素も多くあります。

作文の授業で扱うのは、主に緑のグループ「論理的文章」です。それぞれの文章に合ったルールを知り、実際に書いてみることを通して書くトレーニングを行います。みなさんが教えている学習者は、どの文章に対するニーズが高いでしょうか。大学生なら、論文が書きたいとい

う人も多いでしょう。身につけた日本語をビジネスで活かしたいと思っている人はいろいろな場面に合ったビジネスメールが書きたいと思っているかもしれません。教師は学習者のニーズを把握したうえで、授業内容を決める必要があります。

3 書く活動に必要なこと

前のスライドで、論理的文章には「ある程度決まったルールがあり、トレーニングを積み重ねる程度書けるようになる」と述べました。「ルール」と聞いて、みなさんはどのようなことをイメージしますか。おそらくスタンダードの木の茶色の根の部分、「言語に関する知識」をイメージしたのではないのでしょうか。言語に関する知識とは、適切な語彙や文法、書式などを使う言語構造的な能力、場面に合った言葉を選ぶ社会言語能力、わかりやすい話の展開を意識して書く語用能力などを指します。書き手は複数持っている言語知識の中からあれこれ考えてどの語を使うか、どの表現を使うか、どのような流れで書くか決めているのです。では、作文の授業時間で、言語に関する知識だけを与えれば文章が書けるようになるのでしょうか。残念ながらそうではありません。作文の授業では、もう一つの要素も扱う必要があります。それは、伝えたいメッセージ、つまり「内容」です。書き手の頭の中には内容に関する知識がたくさんあります。すべてについて書くことはできませんから、数ある内容の中から伝えたいことを適宜、取捨選択します。書く活動の最中は、「内容」と「言語に関する知識」の間で「相互作用」が起こります。書き手は、この内容はどう書けばいいか、この言い方で伝わるかを頭の中

で行ったり来たりさせながら確認を繰り返し、ようやく文章を完成させます。文章がうまく書けないときは、「内容」「言語知識」のどちらかまたは両方に問題があると考えられます。

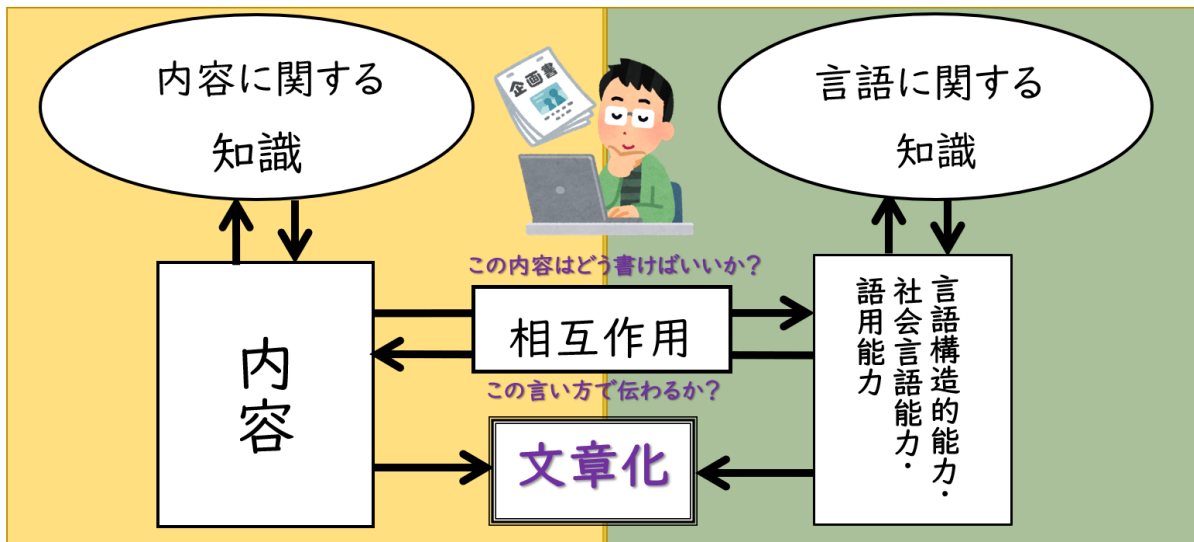


図 2 書く活動に必要なこと

4 書く力のレベル

次に、書く力のレベルについて考えましょう。パート1で、書く力を、「書くことを通して、伝えたい情報やメッセージを読み手に正確に過不足なく伝えられる能力」としましたが、書く力には熟達の尺度、つまりレベルがあります。

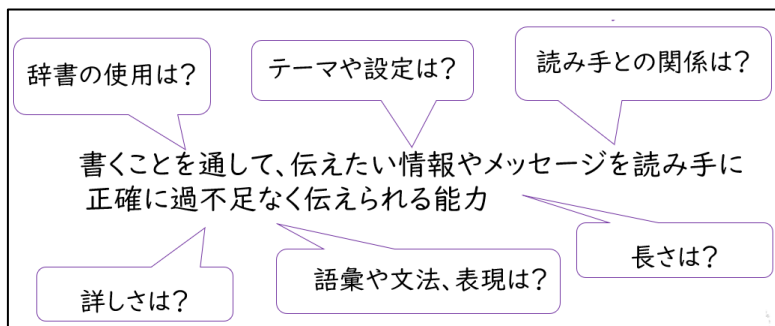


図3 レベルに影響を与える要素

レベルには、辞書の使用／テーマや設定／読み手との関係／^{くわ}詳しさ／語彙や文法、表現／長さなどが大きく関係します。初級レベルの作文のテーマに「自己紹介」や「私の^{しゅみ}趣味」がよくありますが、これはテーマが身近で、設定や想定する読み手をイメージしやすいからでしょう。反対に、「未^み払いの代金を払うよう取引先の会社にメールを書く」「男女の役割分担についてどう思うか自分の意見を^{どうこう}投稿する」などは、テーマや状況設定、読み手との関係が複雑です。そのため、このような書く活動はもっと上のレベルで取り扱う内容と言えます。

【タスク1】 次の^{きじゆつ}記述は、どちらの方がレベルが上だと思いますか。

あ 関心を持つ話題についての短い、簡単なエッセイを書くことができる。

い エッセイやレポートを書く時に、^{こんきよ ていじ}根拠を提示しながら、ある視点に賛成や反対の理由を挙げ、さまざまな^{せんたくし}選択肢の利点と不利な点を説明できる。

もう少しレベルについて具体的に見ていきましょう。はがき、手紙、メールなどを通信文と言います。JF スタンドアードではレベルを6つに分けていますが、それぞれのレベルで書けるはがきや手紙はこのようになります。

表1 レベル別できること:通信文(手紙やメール)の場合

C2	C1と同じ。
C1	個人的な通信文が書ける。その中で、自分が伝えたいことをはっきりと正確に表現することができ、感情表現や、ほのめかしや、冗談を交えながら、柔軟で効果的な言葉遣いができる。
B2	感情の度合いを伝え、出来事や経験の持つ個人的な重要性を強調しながら、相手の近況や考え方に言及する手紙が書ける。
B1	(B1.2) 出来事を伝え、音楽や映画のような抽象的、文化的話題についても、自分の意見を表現する個人的な手紙が書ける。
	(B1.1) 経験、感情や出来事を多少詳細に記した個人的な手紙が書ける。
A2	感謝と謝罪を表現するごく簡単な個人的な手紙が書ける。
A1	短い簡単なはがきが書ける。

一番下のレベル A1 は、短い簡単なはがき。A2 では、ごく簡単な個人的な手紙。B1 になると多少詳細に記した個人的な手紙になり、詳しくが変わってきます。B1 の中でもさらにレベルが上がると抽象的文化的話題についての意見も書けるようになります。さらに B2 になると感情や個人的な重要性を強調しながら相手の近況や考え方に言及する手紙。C1C2 になると個人的な通信文。言葉遣いも柔軟で効果的に使えるようになります。レベルが上がっていくにつれて、長さ、内容、言葉遣い、読み手への配慮が変わっていくことがわかりますね。

ここで簡単なクイズです。図4のメールを読んでください。そして表1の A2 と B1 の記述を見てどちらのレベルのメールか考えてみてください。B1 は中でさらに2つのレベルに分かれています。A2に近い方を B1.1、B2に近い方を B1.2 と呼びます。細かく分けると3つになりますが、どのレベルだと思えますか。

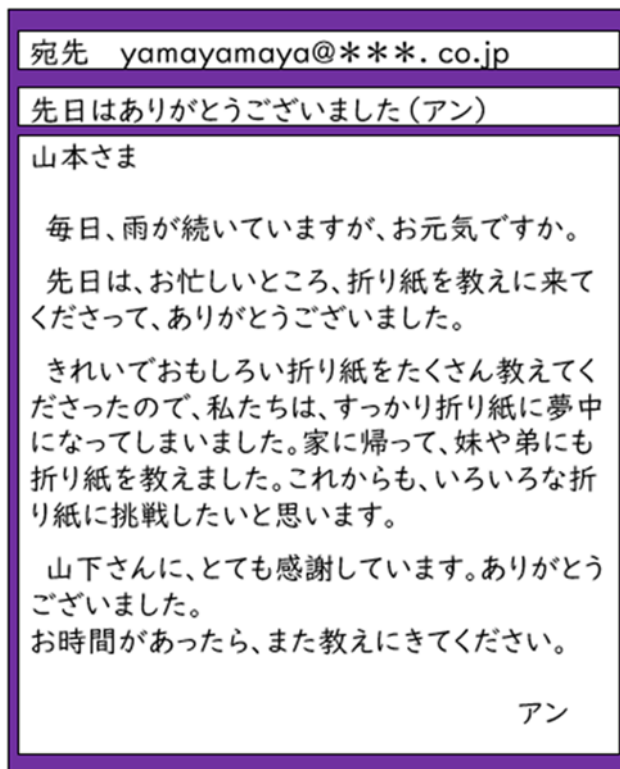


図4 メール例

かどうか。では、いっしょに考えましょう。このメールを見ると、「^お折り紙を^{れい}教えてくれたお礼」
 が書かれています。ということは A2 の^{かのうせい}可能性が有りますね。でもこのメールは「ごく簡単な」
 内容でしょうか。ちょっと^{まよ}迷います。では一つ上がって、B1.1 も見てみましょう。B1.1 には「経
 験、感情や出来事を多少^{しょうさい}詳細に記した」という記述があります。メールにそのような内容があ
 りますか。「すっかり^{むちゅう}夢中になった」「家に帰ってから妹や弟に教えた」「これからも折り紙に
^{ちょうせん}挑戦したい」という内容がここに当たりそうです。

念のため B1.2 も見てみましょう。「^{ちゅうしょうてき ぶんかてきわだい}抽象的、文化的話題」「自分の意見を表現」。ここに当
 たる内容は…なさそうです。結果的に、このメールは B1.1 レベルの活動と考えることができ
 ます。感情や出来事を多少詳細に記した個人的な手紙は一度書いただけではできるように

はなりません。少しずつテーマや設定を変えて何度も書く経験をすることで学習者はこのレベルの活動が安定してできるようになります。

【タスク2】図4のメールが書けるようになるには授業でどのようなことを扱^{あつか}えばいいと思いますか。

5. まとめ

このパートをまとめます。

- 文章(テキスト)は「文学的文章」と「論說的文章」に大きく分けられます。「論說的文章」にはある程度決まったルールがあり、トレーニングすることで読みやすいわかりやすい文章を書くことができるようになります。
- 文章(テキスト)を書くとき、頭の中にある「内容に関する知識」と「言語に関する知識」の間で相互作用が起こります。
- 書く力にはレベルがあります。レベルを決めるのは、辞書使用の有無、テーマや状況設定の複雑さ、読み手との関係、記述の詳しさの度^どあ^あい、語彙や文法・表現の選択、文章の長さなどです。

■ このパートの参考文献と参考サイト

・国際交流基金(2010)『書くことを教える』(国際交流基金 日本語教授法シリーズ8)

ひつじ書房

・「JF 日本語教育スタンダード」 <https://www.jfstandard.jp/go.jp>

タスクの答え

【タスク1】

いの方がレベルが上。どちらも「エッセイを書く」活動だが、下線部を比べてみるとわかる。

あ 関心を持つ話題についての短い、簡単なエッセイを書くことができる。

い エッセイやレポートを書く時に、根拠を提示しながら、ある視点に賛成や反対の理由を挙げ、さまざまな選択肢の利点と不利な点を説明できる。

【タスク2】

・語彙や文法を正しく適切に使うこと。

(～が、先日、お忙しいところ、～てくださって、～ので、すっかり、夢中になる、挑戦する、

お時間)

- ・適切な文体で書くこと。(です・ます)
- ・文と文、段落と段落のつながりをわかりやすくすること。(～が、～ところ、～て、～ので、これ
からも)
- ・わかりやすい構成で書くこと。(通信文は前文、主文、末文という3つの構成で書く)
- ・読み手に配慮して書くこと。(ていねいな姿勢、感謝の気持ち、これからも仲よくしたいと
いう気持ち)
- ・正しい書式で書くこと。(わかりやすいメールのタイトル、段落の最初は1文字下げる)